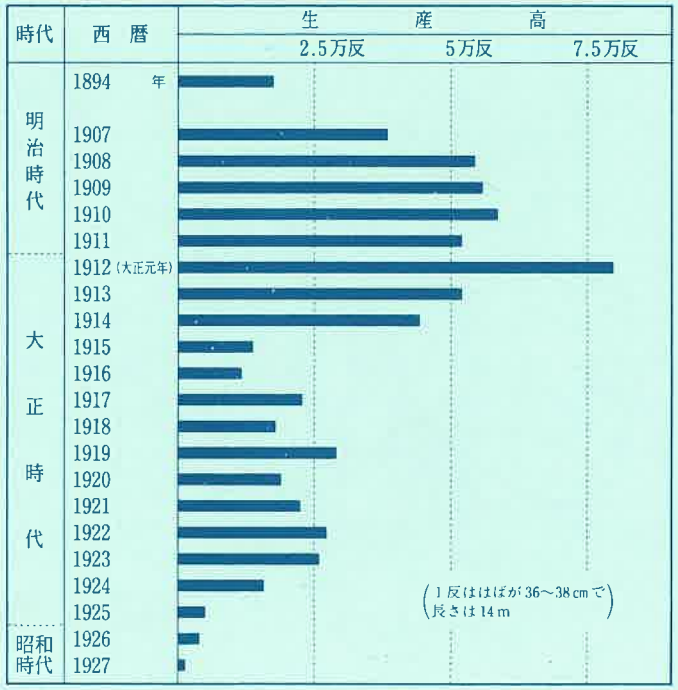
山まゆ織りの歴史（広島市北部を中心として）

時代	西暦	おもなことがら
江戸時代	1739年	鈴張，小河内で山まゆ織りがつくられていた。
	1755	山まゆ織りが藩の特産品であった。
	1818～1829	可部，鈴張を中心に山まゆ織りがさかんに行われた。
	1830～1843	藩の財政が悪くなり，山まゆ織りを独占的にあつかった。
	1865	藩は織物御場所を設け，特産品として規制を強めた。
明治時代	1869	藩の強い統制に対して織女たちがうったえようとした。
	1886	広島の町に初めて出店し，広島名産山まゆ織りとして大いに売り出す。
	1891	可部に山まゆ紬の工場がつくられたが2年で倒産した。
	1894	山まゆ織りが軍人に好まれ全国へ販路を広げた。
	1904	東京，名古屋に出張所をおき全国へ販売した。
大正時代	1912	山まゆ織りの生産量が最も多くなった。
昭和時代	1928	山まゆ織りの生産が記録上なくなった。

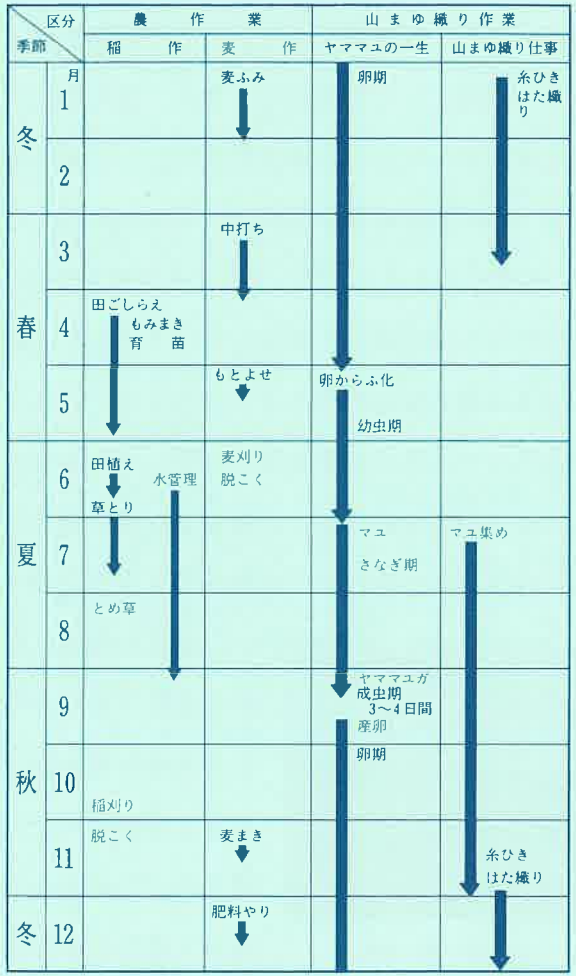
可部の山まゆ織りの生産のうつりかわり（中原，亀山を含む）



山まゆ織りの思い出

「紬問屋からマユや糸にしたものを二反(28m)分をあずかっちゃあ，いんで(帰って)織っちゃあ持って問屋へ行きよりましたよ。一反をひてい(一日)で織ったこともありますよ。たて糸は木綿で，横の糸がヤママユで紡いだ糸を使うて…。」85才になられたおばあさんは「ずっと昔にゃあ投げ座(地機)じゃが，バッタン(高機)になっておもしろいようにできよりました。小学校の3年生のころから，ヒに使う糸を何本も何本も糸車をまわして巻くのを手伝っていましたよ。親は夜中おそうまでしよったし…。しかし可部紬はなくなってしもうて…。昔は紬どころでしたよ。」となつかしそうに話してくださいました。

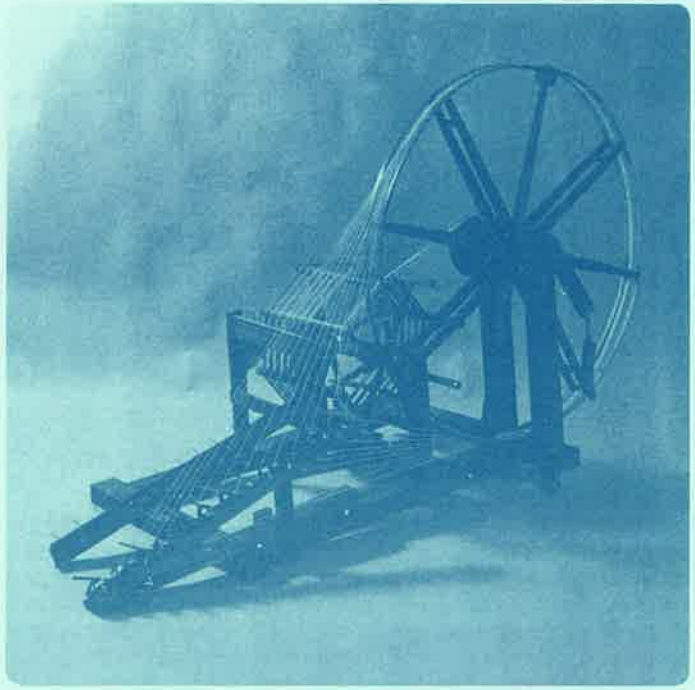
農家の作業ごよみ



学習の手引

第4号

山まゆ織り



糸車

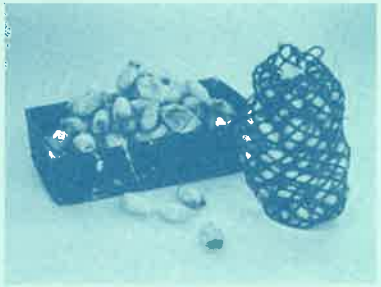
広島市郷土資料館

〒734-0015　広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

☎(082)253-6771

広島市北部でさかんであった 山まゆ織り

広島市北部の可部や安佐町一帯で，かつて山まゆ織りがさかんに行われていました。クヌギ，ナラ，コナラ，ナラガシワなどの葉を食べて育つヤママユガの幼虫がつくったマユから糸をとり，つむいではた織りしたものが山まゆ織りです。



ヤママユガのマユ

山まゆ織りがいつごろからはじまったかははっきりしませんが，1739年にすでに今の安佐町の鈴張、小河内などで織られていたという記録があります。山に囲まれた地域で農作業のあい間に仕事ができて収入が得られることや，クヌギ，ナラなどはもともと薪や炭になるために山に多く植えられ豊富であったことも，この地域で早くから山まゆ織りが行われていた理由のひとつかも知れません。

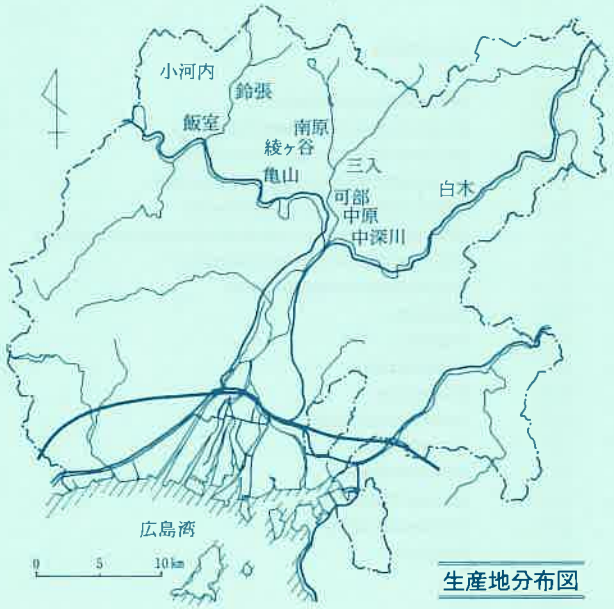
ヤママユガの幼虫が食べるクヌギ

山まゆ織りでさかえた可部

山まゆ織りでさかえた ―可部―

可部の街は，戦国時代に高松城の城下町として発展したと伝えられています。江戸時代以後，山陽と山陰，あるいは広島と県北地域とを結ぶ，交通の重要な地点となり，太田川を上り下りして品物を運ぶ川船の中継地としても発展しました。また太田川上流地域一帯からとれる砂鉄を原料にして鍋や釜などをつくる鋳物産業が発展し，可部の町は，これらの産業をささえる人たちをふくめ商業も発達し，にわかに人口が増え，繁栄していきました。周辺で山まゆ織りが行われるようになると，マユを集める人，マユから糸をとる人，そして糸をつむぐ人，糸を染める人，はたを織る人，服を仕立てる人，織った布地や仕立てた服を売る人などがしだいに増え，町並にはこれらを取りあつかう山まゆ問屋や染め物店，仕立て専門店，そして織り座といわれたはた織り工場などができてきました。山まゆ織りは，軽くてじょうぶではだざわりがよく，冬に暖かいことなどの評判がしだいに全国に広まり，明治時代の終わりころからますますさかんになりました。しかし自然に育つマユを山から採り集めるのがほとんどであるため，天候や鳥害により，安定した量が得られないことや，また綿，麻，羊毛，絹などの繊維製品が大量に機械生産され安く売られるようになったこともあって，しだいにつくられなくなり，昭和2年を最後に途絶えてしまいました。

はた織り機（高機）



生産地分布図